

父の墓

岡本綺堂

青空文庫

都は花落ちて、春漸く暮れなんとする四月二十日、森青く雲青
 く草青く、見渡すかぎり蒼茫そうぼうたる青山の共同墓地に入りて、わ
 か葉はの扇骨かなめがき木籬まきまだ新らしく、墓標の墨の痕あと乾きもあえぬ父の墓
 前ひざまずに跪きぬ。父はこの月の七日なぬか、春雨さむき朝あした、逝せいすい水落花のあ
 われを示し給いて、おなじく九日の曇れる朝、季すえのおじ 叔の墓碑と
 相隣れる処ところを長とこえに住むべき家と定め給たまいつ。数うれば早し、き
 ようはその二七日ふたなぬかなり。

初七日しよなぬかに詣もうでし折には、半破なかばやれたる白張しらはりの提ちようちん灯とうさびし
 く立ちて、生花いけばなの桜の色なく萎しぼめるを見たりしが、それもこれ
 も今日のこりは残なく取捨られつ、ただ白木の位牌と香炉のみありのま

まに据えてあり。この位牌は過ぎし九日送葬の朝、わが瘦せたる手に捧げ来りてここに置据えたるもの、今や重ねてこれを見て我はそも何とかいわん、胸先まず塞ふさがりて墓標の前にうずく跼まれば、父が世に在りし頃親しく往ゆき来かいせし二、三の人、きょうも我より先に詣で来りて、山吹の黄なる一枝を手向けて去りたる所志こころざししみじみ嬉しく、われも携え来りし紫の草花に水と涙をそそぎて捧げぬ。きのうの春雨の名残なごりにや、父の墓標も濡れて在おわしき。

父は五人兄弟の第三人にして、前後四人は已すでに世を去りぬ、随つて我も四人の叔おじを失いぬ。第一の叔は遠く奥州の雪ふかき山に埋うずまれ給いしかば、その当時まだ幼いとけな稚なき我は送葬の列に加わらざりしも、他の三人の叔は後おくれ先さきちて、いずれもこの青山の草露そうろう

しげき塚の主ぬしとなり給いつ、その間に一人いちにんの叔母と一人の姪を
 も併あわせてここに葬りたれば、われは実に前後たび五度、泣いてこの墓
 地ひつぎへ柩を送り来りしなり。人生漸なかばく半を過ぎたるに、已に四人の
 叔に離れ、更に一人の叔母と姪を失いぬ。仏氏ぶつしのいわゆる生しょうじ
 者や必滅ひつめつの道理、今更おどろくは愚痴ぐしに似たれど、夜雨孤灯やうことうの
 下もと、翻たつて半生いくた幾多の不幸を数え来れば、おのずから心細くうら
 寂さびしく、世たよりに頼なく思わるる折もありき。されど、わが家には幸
 に老おいたる父母ありて存すれば、これに依つて立ち、これに依つて
 我意を強うしたるに、測らざりき今またその父に捨てられて、闇
 夜に灯ともしび火を失うの愁うれいを来きたさむとは。悲かない哉かな。

風樹ふうじゆの嘆は何人といえども免れ難からんも、就なかんずく中なかわれに

於て最も多し。父は一度われをして医師たらしめんと謀りしが、
思う所ありてこれを廃し、更に書を学ばしめたるも成らず、更に
画を学ばしめたるもまた成らず、果は匙を投げて我が心の向う所
に任せぬ。かくて我は何の学ぶ所もなく、何の能もなく、名もな
く家もなく、瓢然たる一種の道楽息子と成果てつ、家に在て
は父母を養うの資力なく、世に立ては父母を顕わすの名声なし、
思えば我は実に不幸の子なりき。泉下の父よ、幸に我を容せと、
地に伏して瞑目合掌すること多時、頭をあぐれば一縷の線香は消
えて灰となりぬ。

低徊去るに忍びず、墓門に立尽して見るともなしに見渡せば、
其処ここに散のこる遅桜の青葉がくれに白きも寂しく、あな

たの草原には野を焼く烟けむりのかげ、おぼろおぼろに低く這はい高く迷
 いて、近き碑を包み遠き雲を掠かすめつ、その蒼あおく白き烟の末に渋谷
 代々木、角つのはず筈の森は静に眠りて、暮るるを惜む春の日も漸くそ
 の樹梢こずえに低く懸れば、黄たそがれ昏ちかき野山は夕ゆうもや靄にかくれて次第
 にほの闇くらく蒼黒く、何処いづくよりとも知れぬ蛙かわずの声断続きれぎれに聞えて、
 さびしき墓地の春のゆうぐれ、最いとど静に寂しく暮れてゆく。

思いい出いずれば古年こぞの霜月の末、姉の児この柩ひつぎを送りてここへ来り
 し日は、枯野に吠ゆる冬の風すさまじく、大粒の霰はらはらと袖
 にたばしりて、満目荒涼、闇くらく寒く物すごき日なりき。この凄じ
 き嚴冬の日、姪の墓前に涙なみだをそそぎし我は、翌あくる今年このとの長閑のどかに静
 なる暮春のこの夕ゆうべ、更さらにここに来りて父の墓こくに哭せんとは、人事

畢ひつきょう 竟きやう 夢の如し。誰たれか寒き冬を嫌いて、暖き春を喜ぶものぞ、
詮せんずれば果敢はかなき蝴蝶の夢なり。

然れども思え、いたずらに哭して慟どうして、墓前の花に灑そそぎ尽し
たる我が千行せんこうの涙なみだ、果して慈父が泉下の心に協かなうべきか、いわ
ゆる「父の菩提ぼだい」を吊とむらい得べきか。墓標は動かず、物いわねど、
花筒はなづつの草葉にそよぐ夕風の声、否いなとわが耳みみに囁ささやくように聞ゆ。

これあるいは父の声にあらずや。

遊ゆく水は再び還かえらず、魯陽ろやうの戈ほこは落日を招き還かえしぬと聞きたれ
ど、何人も死者を泉下より呼よびおこ起おこすべき術すべを知らぬ限かぎりは、われも
徒いたずら爾にに帰らぬ人を慕めうの女々めめしく愚痴ななるを知る、知つて猶な慕お
うは自然じやうの情じやうなり。されど、われは徒爾なに哭して慟どうする者にあらず

ず、おんなども女児のすなる仏いじりに日を泣暮なきくらす者にあらず。われは罪
 なき父の靈の、めぐみ恵ふかき上帝かみの御側みそばに救い取られしを信じて疑わ
 ず、ごせ後世安樂を信じて惑わず、更に起たつて我一身のため、わが一
 家のため、奮つて世と戦わんとするものなり。哀悼あいとう愁傷、号泣
 慟哭、一枝しの花に涙を灑そそぎ、一縷るの香に魂こんを招く、これ必ずしも
 先人に奉ずるの道にあらざるべし。五尺の男子、空しく児女の啼てい
 を為なすとも、父の靈あはろこ豈あはろこ憚おどび給わんや。あるいは恐る、日ごろ心猛たけ
 かりし父の、地下より跳おとり出いでて我を笞むちうつこと三百、声を励まし
 て我が意い氣くじ地じなきを責め、わが腑ふ甲がい斐いなきを懲こらし給わんか。
 孔子くわんしついわずや、四海しかい皆けい兄いてい弟ていなりと、人誰か兄弟なきを憂いん。
 基クリスト督トいわずや、わが天てんに在います父の旨むねを行なう者はこれわが兄弟わ

が姉妹わが母なりと、人誰か父母なきを憂いん。ましてわれは今
 やこの父を失えるも、家に残れる母あり、出でて嫁げる姉あり、
 親戚あり、朋友あるに、何ぞ俄にわかに杖を失いし盲者の如く、水を離
 れし魚の如く、空しく慌て空しく悲むべき。父よ、冀こいねがわくは我たすを扶
 けわれを導いて、進んで世と戦うの勇者たらしめよ、哀かなしんで傷やぶら
 ざるの孝子たらしめよ。窃ひそかにかく念じて、われは漸く墓門を出
 でたり。出ずるに臨みてまたおのずから涙あり。湿うるめる眼をしば
 たたきて見かえれば、そよ吹く風に誘われて、花筒はさに挿みたる黄
 と紫の花相乱れて落ちぬ。鴉からす一羽、悲しげに唾あ々と啼なき過れば、あ
 なたの兵營へいに喇叭らっぱの声遠く聞ゆ。

おぼつかなくも籬かきに沿い、樹間このまをくぐりて辿たどりゆけばここにも

墓標新らしき塚の前に、ひとむれ一群の男女なんによが花をささげて回向えこうする
 を見つ、これも親を失える人か、あるいは妻を失えるか、子を失
 えるか、誠にうき世はいちにん一人のうき世ならず、家々の涙を運ぶこ
 の青山の墓地、ほうそう芳草年々緑なる春ごとに、われも人も尽きぬ涙
 を墓前に灑ぐべきか。あゝ噫。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「文芸倶楽部」

1902（明治35）年6月号

初出：「文芸倶楽部」

1902（明治35）年6月号

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

父の墓

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>